



たて やま し こ も ぐち じょう あと
館山市古茂口城跡

—一般県道館山大貫千倉線道路改良事業埋蔵文化財調査報告書—







序 文

三方を海に囲まれた千葉県には、温暖な気候を反映して全国屈指の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が残されています。今回発掘調査を行った館山市は、房総半島南端に位置し、県下において最も温暖な気候の地域です。県内の他の地域ではみられない海蝕洞穴ややぐらなど、この地域の風土に由来する特異な遺跡が数多く残されています。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第5集として、一般県道館山大貫千倉線道路改良事業に伴って実施した館山市古茂口城跡の発掘調査報告書です。古茂口城跡は、中世の城跡とされており、城跡本体の調査は過去一度も行われていないため、その詳細をうかがい知ることはできませんでした。今回の調査範囲は、城跡の外縁部にあたり、調査成果として、平安時代の水田と水路・畦畔が検出されました。周辺の調査事例と合わせ、平安時代の土地利用の一端を知るうえで貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成27年3月

千葉県教育委員会
文化財課長 永沼律朗





凡　　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部安房土木事務所による一般県道館山大貫千倉線道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
古茂口城跡 館山市古茂口 31-1 ほか (遺跡コード 205-008)
- 3 本事業は千葉県県土整備部の依頼を受け、発掘調査を平成 25 年度、整理作業を平成 26 年度に千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下のとおりである。

平成 25 年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 湯浅京子

発掘調査班長 蜂屋孝之

担当者 主任上席文化財主事 加藤正信

実施期間 平成 26 年 3 月 3 日～3 月 14 日

平成 26 年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼律朗

発掘調査班長 蜂屋孝之

担当者 主任上席文化財主事 加藤正信

実施期間 平成 26 年 9 月 1 日～11 月 28 日

- 5 本書の執筆は加藤正信が、編集は落合章雄が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、館山市教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、同安房土木事務所ほか多くの方々からご指導、ご協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第 1 図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「館山」平成 21 年
第 3 図 館山市発行 1/2,500 館山市地形図



本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 事業の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と経過.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	4
第2章 検出した遺構・遺物.....	7
第1節 検出した遺構.....	7
1 調査の概要.....	7
2 検出した遺構.....	7
第2節 出土した遺物.....	10
1 概要.....	10
2 出土遺物.....	10
第3章 総括.....	13
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)	2
第2図 迅速測図 (S=1/25,000)	3
第3図 遺跡周辺地形図 (S=1/5,000)	5
第4図 グリッド配置及び調査区.....	8
第5図 遺構平面図.....	9
第6図 出土遺物実測図.....	11

図版目次

図版1 遺跡周辺空中写真 (S=約1/9,000)	SD-001 (西から)
図版2 西地区近景 (東から)	SD-001 (南西から)
西地区近景 (西から)	SD-001・SX-001 (東から)
東地区トレンチ掘削状況	SX-001 遺物出土状況
西地区遺構検出状況	図版3 出土遺物



第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過

館山市は、房総半島の南端に位置し、近年東京湾アクアラインおよび館山自動車道の開通によって自動車の流入量の増加に伴い、一般県道館山大貫千倉線の交通量の増加が見込まれることから、本県道の拡幅および歩道建設工事の道路整備計画がたてられた。この整備計画にあたって、平成21年10月に千葉県安房地域整備センター所長より事業地内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の協議文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、平成21年11月に事業計画地内に埋蔵文化財包蔵地（古茂口城跡）が所在する旨の回答を行った。この回答を受け、その取扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

なお、事業地の一部（長須賀条里制造跡・東山遺跡）については、先に平成11年度・平成15年度に財團法人千葉県文化財センター（現 公益財團法人千葉県教育振興財團）による発掘調査が実施され、報告書が刊行されている（2005 千葉県文化財センター調査報告第502集『緊急地方道路整備委託（館山大貫千倉線）埋蔵文化財調査報告書 館山市長須賀条里制造跡・東山遺跡』）。

発掘調査は、平成25年度に450m²の道路拡幅予定地に対して実施し、平成26年3月3日に開始し、3月14日に現場作業を終了した。

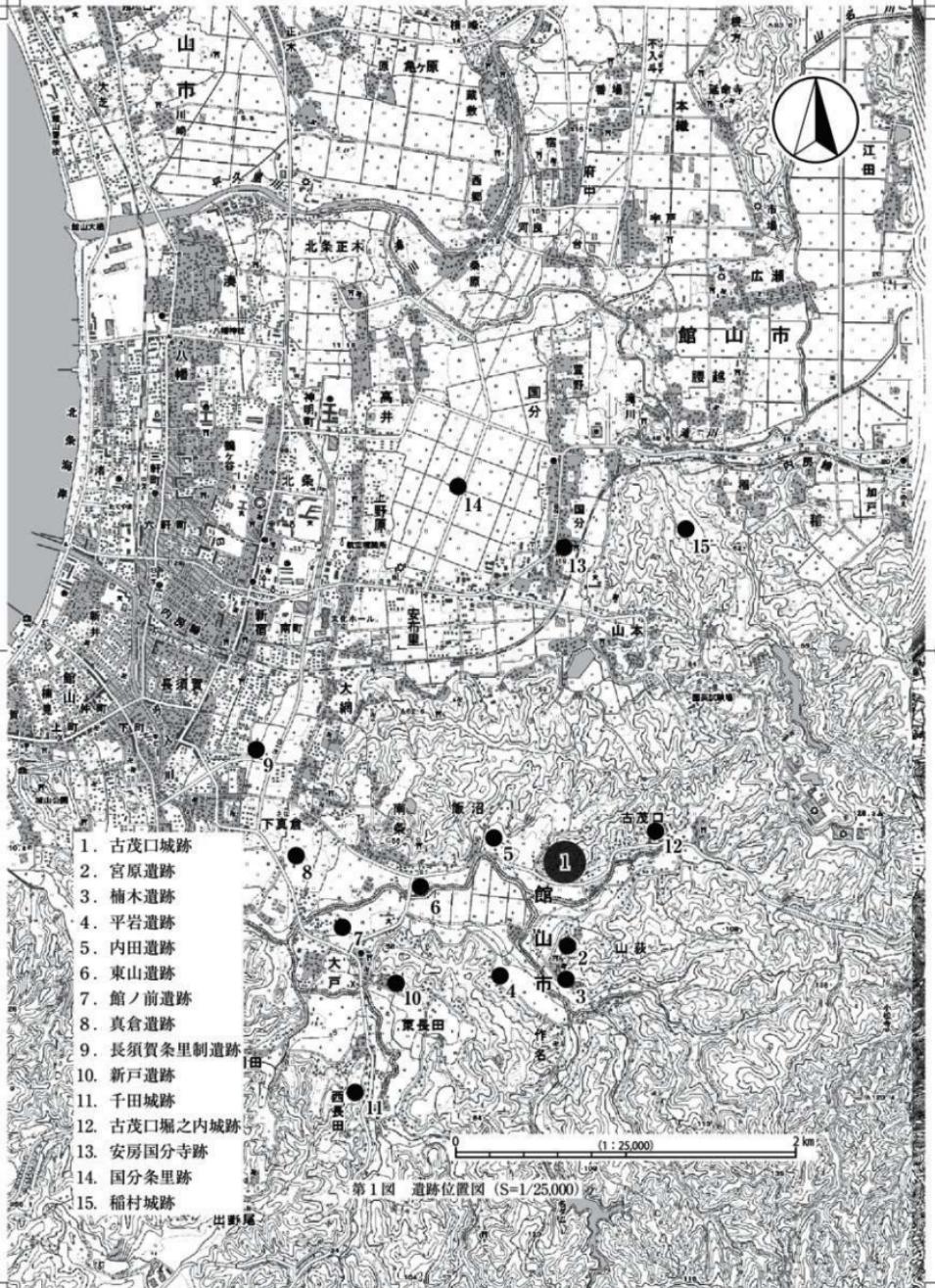
整理作業は、平成26年度に実施した。

2 調査の方法と経過

発掘調査 調査対象の遺跡は、中世城郭である古茂口城跡の最外縁部と想定される部分であり、城跡周辺の遺構、周辺遺跡の調査結果から古代～中世の集落遺跡の検出が想定された。今回の調査対象地は、東側の狭い東地区と西側の比較的広い西地区の2地点に分かれている。東地区は路肩をほとんど伴わない交通量の多い県道に隣接しており安全上、掘削の範囲が限定され狭いトレンチの調査となった。西地区は比較的まとまった調査面積で最近まで水田であった場所であり、表土をすべて掘削し、用地外に堆土して調査を実施することとした。調査終了後、調査区に仮置きした堆土を重機で埋め戻し、調査前の状態に復旧し作業を終了した。なお、調査対象地には立川ローム層が存在しないため、下層確認調査は実施しなかった。

東地区では黒色を呈する硬質のシルト質岩が地山として確認され、水田の耕作土の堆積層が3面確認された。いずれの面も近代以降の遺物の混入する層であり、遺構は確認できなかったことから堆積土層の実測を行い、調査を終了した。西地区では同様の黒色を呈する硬質のシルト質岩が地山となり、それまでに最大4面の水田面を検出した。地山直上の水田面には畦状の盛り上がり部分と溝とが接して検出された。その覆土（水田耕作土）中から平安時代の内壁処理した壙が検出されたことから該期の水田面と判断し、溝内の堆積土の掘り上げ・畦畔の検出を行い、実測・遺物取り上げ・写真撮影等の記録作業を実施した。その後調査前の状態に埋め戻しを行い現地調査を終了した。

記録作成には従来通り平板測量によるトレンチ・遺構平面図を作成したほか、遺構断面図についての実測を行った。写真撮影は、6×7及び35mmフィルムカメラによりモノクロ・カラーリバーサル撮影を実



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)





施し、補助的にコンパクトデジタルカメラで撮影をおこなった。

整理作業 調査図面・写真的記録整理を進めた。その挿図・写真図版原図を作成しトレースや写真補正等を行い、挿図・写真図版についてはデジタル作成した。原稿執筆・編集・校正作業をへて、この度報告書刊行となった。また、編集作業と併せて収納整理作業も実施した。

第2節 遺跡の位置と環境（第1～3図、図版1）

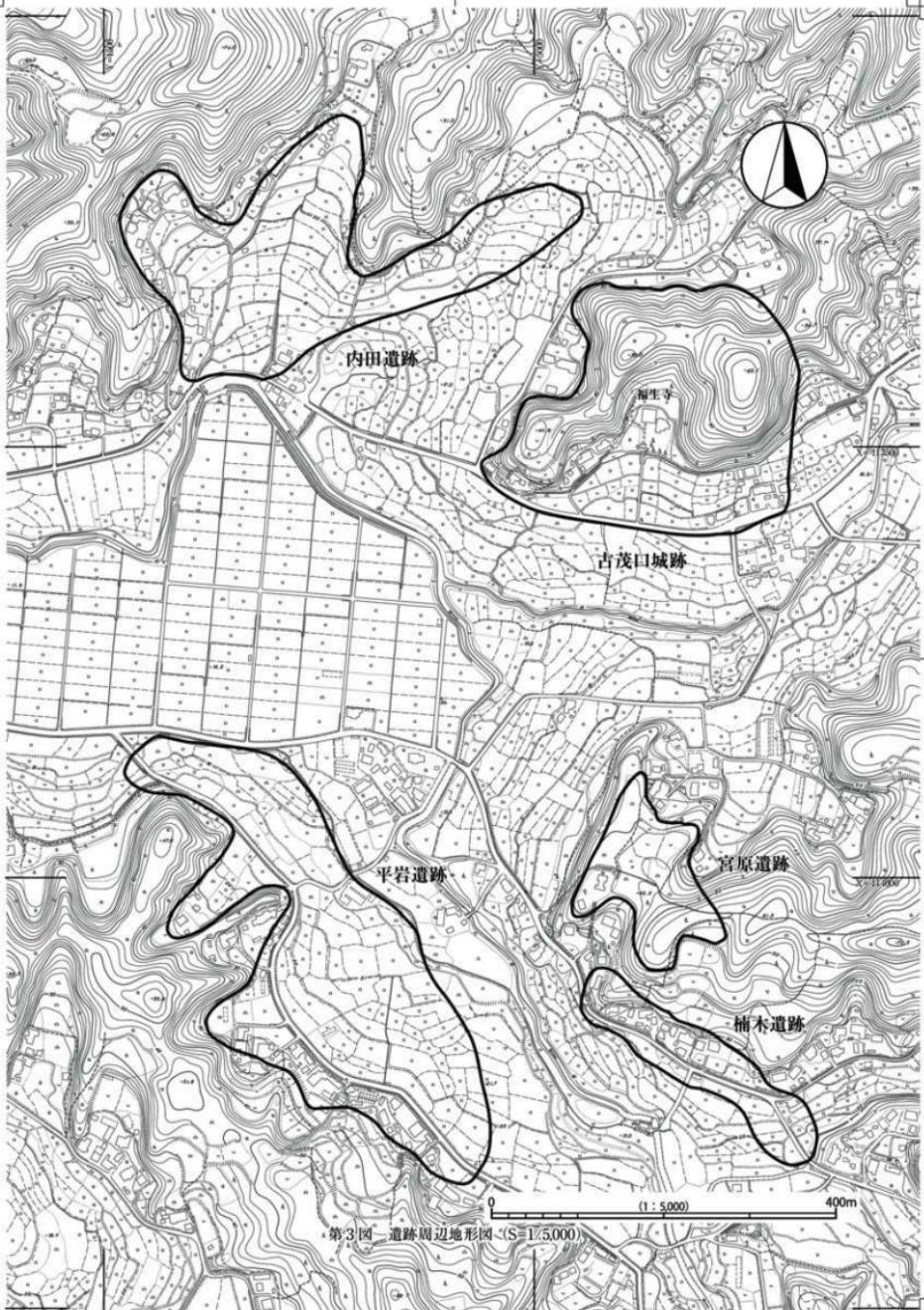
周辺の地形 房総半島南端に位置する館山市は、房総半島の中で最も温暖な地域である。市街地化した市の中心部は、東京湾に臨む東西4km、南北5kmの海岸平野にあって、鏡ヶ浦とも呼ばれる遠浅で波静かな弧状の海岸線に西面している。平野の周囲は、新第三期層群からなる丘陵によって囲まれている。丘陵の縁辺部には完新世の海成段丘が分布し、地震性隆起の累積によって形成されているものと考えられている。平野には南北方向に多くの砂丘列が存在し、集落・畠地が形成され背後の後背湿地は水田として多く利用されている。平野の北部では平久里川、南部では汐入川の二級河川が流入しているほか、各所で小河川が流入している。これらの河川は過去に氾濫を繰り返し河道を換え自然堤防を形成し、上記の地形と相まって複雑な様相を呈している。

古茂口城跡は、館山平野の南東端の最奥部に位置し、海岸から約4km入り込んだ平野の最奥部で、樹枝状に平野に張り出した丘陵が盛り上がる部分の付け根の河岸段丘上に所在している。平野の南を流れる汐入川の上流部にあたり、汐入川が上流で細かく分流するうちの一つ笠沼川が形成した支谷に南面する部分にある。すぐ東側の丘陵尾根は房総半島を西側と東側とを分ける分水嶺となっている。

今回の調査対象地点は、館山市古茂口に所在し、汐入川支流の笠沼川に開削された支谷の最奥部北側に広がる河岸段丘と丘陵裾部との境界付近の平地の部分である。平地とはいっても河川までの段丘面は傾斜地となっており、河川と平行に数段の棚田が作られている。棚田の形状は細長く作業効率が良くないために、近年国主導による耕地整理が大規模に実施されている。その際周辺の遺跡の発掘調査が実施されている（1998 財団法人絶滅文化財センター年報 №12 一平成11年度・12年度—「楠木遺跡」「宮原貝塚」「内田遺跡」「細畠遺跡」ほか）。発掘調査の結果、縄文土器や古墳時代から平安時代までの土師器を主とする遺物が検出されたものの量的には少なく、集落を構成するような遺構は検出されておらず集落が平地全面に展開するような様相は確認されていない。また、本県道の西側部分で実施された平成11年度の道路拡幅事業の折には、東山遺跡から弥生時代の小区画水田・井戸・溝状構造などが検出され、低地に立地する遺跡のあり方が確認されている。

周辺の遺跡 海岸平野の砂丘列上に多くの遺跡が所在しており、調査歴のあるものを中心に概観することにする。縄文時代から遺跡が認められ、沿岸部には海蝕洞穴が数多く分布している。広く知られる遺跡としては、大寺山洞穴遺跡があげられる。市指定遺跡である大寺山洞穴遺跡は、縄文時代後期を主体とした遺物包含層が確認され、全身の骨格を残した人骨等も出土している。出野尾貝塚も海蝕洞穴遺跡で縄文時代前期の土器が出土している。また、調査地点近隣の宮原貝塚では縄文時代中期の炉跡が検出されている。このほか遺構は検出されていないが、今回の調査地点に隣接する東山遺跡では縄文時代早期から晩期の土器片が、東田遺跡では縄文時代早期・前期の土器片などが出土している。

弥生時代の遺跡としては、萱野遺跡や東田遺跡などがあげられる。萱野遺跡は弥生時代後期の環濠のほか、多数の堅穴住居跡や方形周溝墓などが検出されている。東田遺跡では堅穴住居跡や方形周溝墓、溝状





遺構が検出され、弥生時代中期から後期の土器が多量に出土している。

古墳時代の遺跡は数多く確認されており、祭祀遺跡が多く中でも東田遺跡は古墳時代後期の集落と古墳時代後期から奈良・平安時代に比定される大溝及び大型掘立柱建物跡などが検出され、大量の土器と共に土製模造品などが出土しており館山地区では特徴的な遺跡となっている。このほかに祭祀に関する遺跡で土製模造品が出土した遺跡として、つとば遺跡、大戸館ノ前遺跡、東長田遺跡などがある。また集落や墓域としては萱野遺跡、大寺山洞穴遺跡、峯古墳などがある。萱野遺跡では古墳時代前期及び後期の集落が確認され、前期古墳の周溝の可能性のある溝も検出されている。大寺山洞穴遺跡では、丸舟を転用した舟棺が洞穴内で検出されたほか、多種多様な副葬品が出土しており注目される。峯古墳は、貴重な高塚古墳で、詳細は明らかではないが滑石製勾玉やガラス玉のほか国内産ではない可能性があるトンボ玉などが出土品として伝世している。

奈良・平安時代の遺跡では、県指定遺跡の安房国分寺跡がある。安房国府も近辺に所在すると推定され南房總市（旧三芳村）府中周辺をその候補地とする説もあるが、現在のところ国府に直接関連すると考えられる遺構が検出された遺跡はない。奈良・平安時代の遺構は、萱野遺跡や東田遺跡などで検出されている。また、周辺地区では「坪」の付く地名が多く存在し、北条条里制遺跡・長須賀条里制遺跡・江田条里制遺跡などが点在している。長須賀条里制遺跡や北条条里制遺跡では発掘調査が実施され、条里遺構に該当するような畦畔が検出されている。

中・近世では、戦国大名の里見氏の城として知られる市指定遺跡の館山城跡、国史跡の稻村城跡をはじめとして遺跡周辺の南条城跡（鳥山城＝鳥山城は明治時代の誤記）、調査地点北側丘陵上を占める古茂口城跡などがあげられる。中世以降の墓地としては「やぐら」が多く存在し、特に平久里川上流域の平野東端に近い丘陵裾部に比較的集中することが指摘されている。「やぐら」は、鎌倉との強いつながりを想起させる遺構であり、鎌倉の寺院領や直接的な関係を持つ御家人の領地における葬法として認識されている。

古茂口城跡は、調査区の北側を中心に展開する城跡で、笠沼川に南面する方形の谷部分を占める飯富山福生寺の裏山にあたる比高 15 m 程の丘陵の部分を範囲とし、平地に面する部分には土壠状の高まりが連続し前面の水田との境界をなしている。寺院の境内地は平坦で方形状で比較的広く、丘陵面に接し北側奥には現在は墓地となっている 3 段の平坦面が見られる。また、北側尾根上は比較的平坦で広さがあり何らかの郭の連続を想定してよさそうである。谷戸奥に展開する中世方形城館の様相を想定するにふさわしい地形であるといえよう。

参考文献

- 1995 長須賀条里制遺跡調査会 「長須賀条里制遺跡発掘調査報告書」
- 1998 財團法人越南文化財センター「財團法人越南文化財センター年報 No.12 - 平成 11 年度・12 年度 -」
「楠木遺跡」「宮原貝塚」「内田遺跡」「細畠遺跡」ほか
- 2003 千葉県「千葉県の歴史 資料編 2 (弥生・古墳時代)」「大寺山洞穴遺跡」
- 2003 千葉県「千葉県の歴史 資料編 2 (弥生・古墳時代)」「峯古墳」
- 2004 財團法人千葉県文化財センター「千葉県文化財センター調査報告第 474 集
『館山市長須賀条里制遺跡・北条条里制遺跡・国道 410 号(北条)埋蔵文化財調査報告書』」
- 2005 財團法人千葉県文化財センター「千葉県文化財センター調査報告第 502 集
『緊急地方道路整備委託(館山大貫千倉線)埋蔵文化財調査報告書 館山市長須賀条里制遺跡・東山遺跡』」
- 2006 財團法人千葉県教育振興財團「千葉県教育振興財團調査報告第 563 集
『館山市長須賀条里制遺跡・一般国道 410 号道路改良事業(大坪)埋蔵文化財調査報告書』」
- 2006 財團法人千葉県教育振興財團「千葉県教育振興財團調査報告第 551 集
『館山市東田遺跡・国道 410 号(北条)埋蔵文化財調査報告書』」



第2章 検出した遺構・遺物

第1節 検出した遺構

1 調査の概要

東地区は、調査区の東側に位置するトレンチ状の調査区で、幅1.0m、長さ5.2mのほぼ東西方向に延びる調査区である。南側の県道は交通量が多く車両の通行と調査の際の安全性のために、北側は隣地との境界の崩落防止のために、調査の排土は隣地を借用して用地外に仮置きし調査を実施した。掘削したトレンチは幅約1mの狭小なものである。調査前は畠地となっており、東側する宅地よりもわずかに低くなっている。西隣の水田面よりは約30cm高い。基本層序は、上から現表土の畠作耕作土、畠地として利用するための現代の客土、水田耕作土の暗灰褐色土で遺物の包含層、上位水田の動床にあたる暗灰褐色土で鉄分の沈着が著しい遺物の包含層、地山となる泥岩層の層序で、地山上面まで約0.9mの深さを測る。遺物は上下2つの層中から縄文土器、土師器、須恵器などが小破片で出土しており、客土された土に混入していたものとみられる。

一方西地区は、古くは水田として利用されており、当時の水路や湧水抜きの溝が掘削されており一部は調査不能の部分もあった。西地区も調査の排土は隣地を借用して用地外に仮置きして調査を実施し、終了後に埋め戻しを行い現況へ復帰した。

西地区は、東端では水田下に地山の泥岩層の地山が検出され、北側丘陵部の岩盤が南に延び調査区内にまで及んでいた。岩盤を掘削し水田の造成が行われたものと判断された。調査区中央は堆積土が最も厚く、南北方向に水路状の緩やかな崖みの構造構が検出され、丘陵部からの湧水を南の笠沼川方向へと導く水路と判断された。その水路と直交するように南北方向にわずかな高低差の段差、地山整形による畦畔状の盛り上がりと小水路状の溝が合わせて検出された。また、完形に近い内窓処理された土師器壺が地山直上から出土している。9世紀後半から10世紀にかけての土師器壺とみられる。地山層の上に広がる水田面は内黒土師器壺から当該期の畦畔・小水路を伴う水田遺構の一部であると判断された。

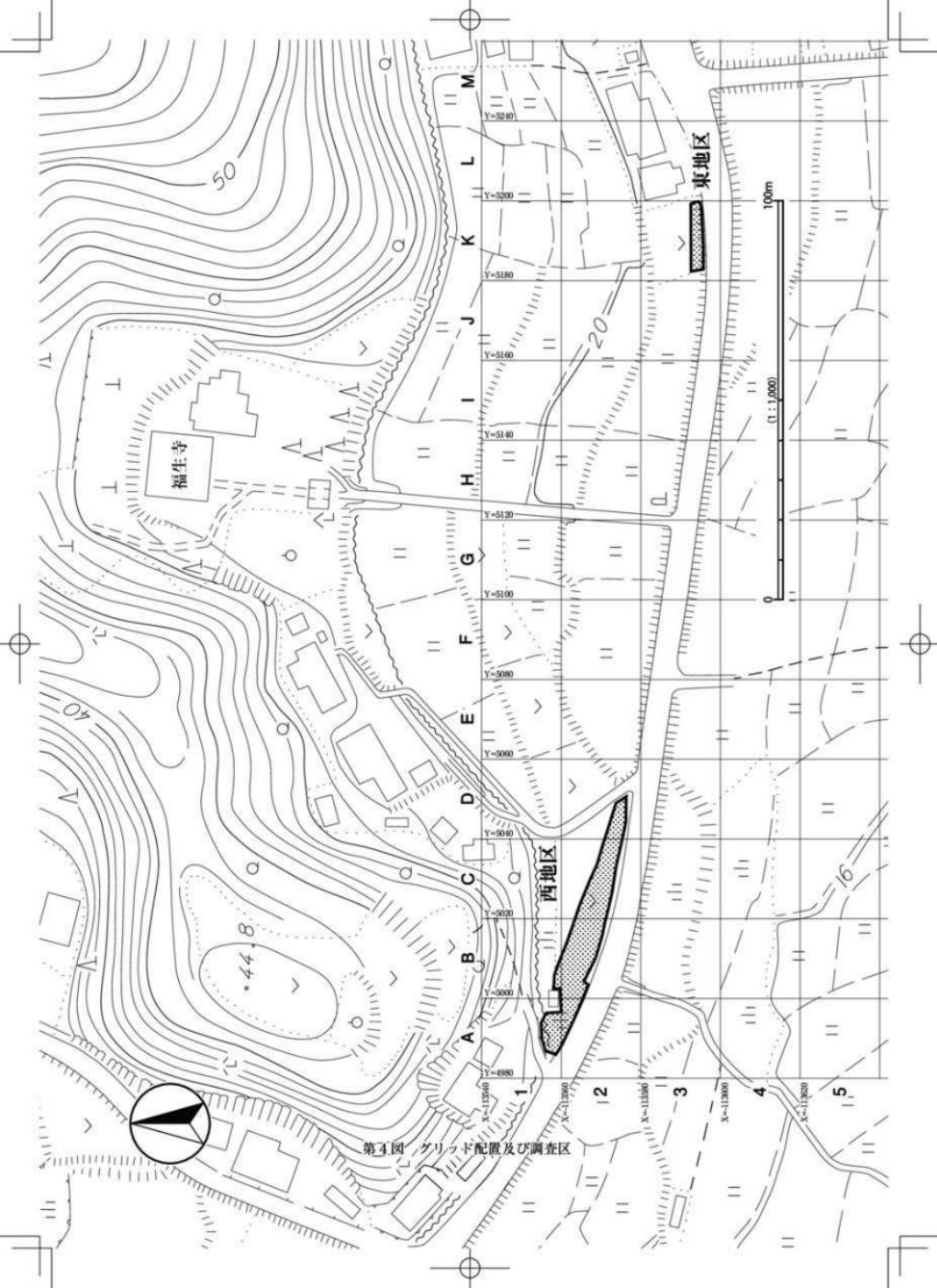
西地区的基本層序は、上から地表面の水田時の耕作土、1層の下の水田耕作土で最下面に鉄分の沈着がある粘性の強い灰黒褐色土、さらに下層の水田耕作土で鉄分の沈着がみられる灰褐色土、白色スコリアを含む粘性が強く鉄分の沈着している黒褐色土、最下層の水田耕作土で粘性の強い灰褐色土、地山層とみられる固くしまった泥岩層となっている。水田面は4面認められた。

2 検出した遺構

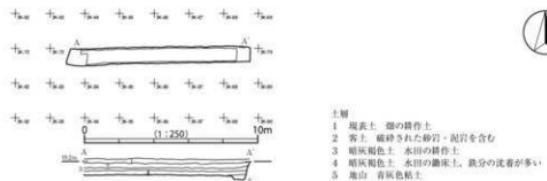
SX-001（第5図、図版2）

西地区に検出された畦畔・一部の溝を伴う水田遺構をSX-001とした。西地区のほぼ中央付近を中心とする遺構で、中央には後述のSD-001溝が北から南流して本遺構を二分している。SD-001溝の西側と東側では様相を異にするため溝の西側と東側とに分けて詳述する。

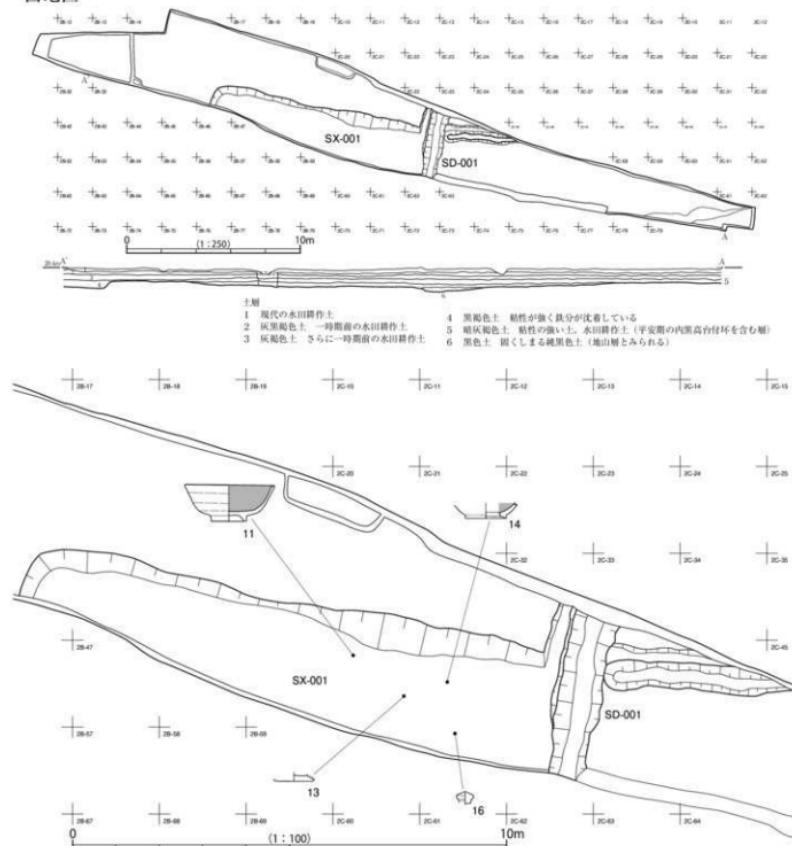
SD-001溝の東側は、比較的平坦に近く、西側に比べてより緩やかに北から南に傾斜している。調査区の東端付近では、地山の泥岩が露呈し、地山の岩盤を一部掘削して平坦化している痕跡が認められる。露呈した岩盤の南側は全体に共通の地山である硬質の黒色土が観察される。北端近くには地山の硬質黒色土を皿状に低く掘り残した高さ約5cmの高まりが中央のSD-001からほぼ直角に東へ延び、調査区外へ延び



東地区



西地区



第5図 道構平面図



ている。その南側は緩やかに南方向に傾斜している。畦畔の高まりの北側には浅い小溝が畦畔と平行に走り、SD-001 へ水が流入するように底面は緩やかに西へ傾斜し SD-001 の上端に接続している。

SD-001 溝の西側では、調査区北寄りと南寄りとの間に地山の掘り込みによる段差が一段認められ、南北を区画している。SD-001 へ東側の畦畔・小溝の接続する西側に段差が作られ、ほぼ西方向に約 12 m 延び、ほぼ直角に南に折れ曲がり調査区の南端に接している。段差は幅 40cm の中で、高さ約 10cm を減じるもので急傾斜ではないが明らかに段差を持って地山を掘り込んでいる。

覆土としては、段差の上・下で明瞭な差異は認識できなかった。段差の南側からは、内里処理の坏が地形に近く 1 点検出され、その他比較的大型の破片も検出された。上側からの流入か段差下への廃棄によるものとみられ、段差下は水田、段差上は水田の水際であろうと推測される。大型破片の土器などの出土状況から、同時期の水田関連遺構と考えたい。

SD-001 (第 5 図、図版 2)

西地区のほぼ中央で検出された溝である。南北方向に調査区を横断するように直線的に位置している。検出した長さは 3.7 m で、最大幅は北端の 1.5 m、最小幅は南端の 0.8 m を測る。地山の硬質な黒色土中に掘り込まれた浅い皿状の溝で、覆土は上層の黒色土と同一である。溝の南端に向かって掘り込みを減じ徐々に浅くなっている。西地区の中で最低地に位置し、調査区北側の丘陵端部の平坦面との境界付近からの自然湧水を笠沼川へ排水するために掘り込まれた溝と判断される。溝の西側とは比高最大 26cm、東側は比高 25cm ~ 15cm と深さに差がある。東側の北寄りでは作りだしの畦畔状の土手が接し、その北側には、東から本溝へ流入する小規模な幅約 0.5m の溝が接続している。

第 2 節 出土した遺物

1 概要

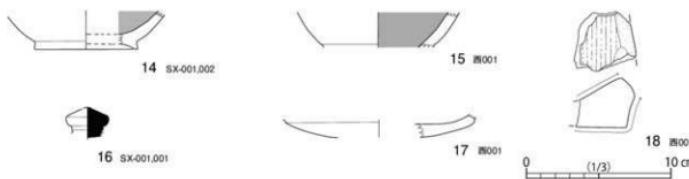
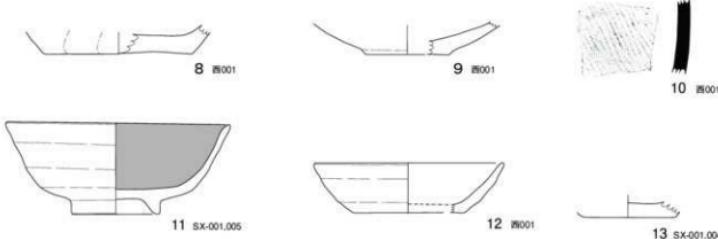
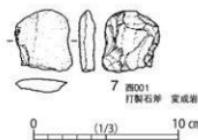
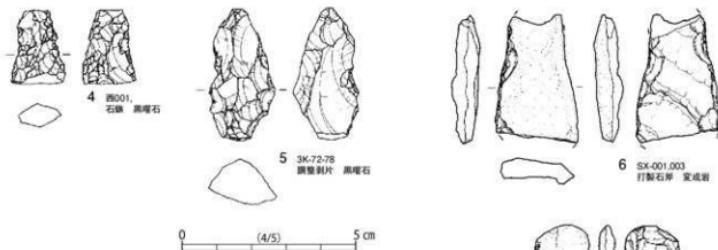
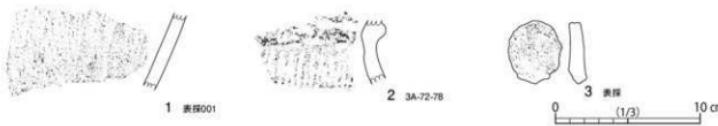
今回の調査で出土した遺物は、完形に近い土師器坏 1 点を除けば、検出された水田遺構等に伴うと判断されるものではなく、二次堆積ないしは後世の人为的な客土と判断される土層の中から出土した遺物である。出土した遺物の種類は、縄文時代前期及び中期と考えられる土器・石器・古墳時代土師器・須恵器、平安時代土師器・須恵器、中世陶器、近世陶磁器類で、ほぼ全ての遺物が摩滅し小破片となって出土しており、ほぼ全形を残している個体は土師器の坏 1 点のみである。古茂口城跡との関連を示唆する遺物は、今回の調査地点からは出土していないと判断される。

以下、各時期の遺物について、図示できたものについて記す。

2 出土遺物 (第 6 図、図版 3)

土器類

縄文土器は、40 点余りの土器が出土している。摩滅が顕著で時期が判断できるものが少なく、前期後葉の諸磯・浮島式及び中期前葉から中葉の土器片と判断されるものである。拓本を掲載できのは、わずかに 3 点である。1 は深鉢の胴部に施された貝殻腹縁文である。砂の混入が多い胎土である。浮島ⅡからⅢ式であろう。2 は深鉢の口縁部である。口唇部を欠いているが、肥厚した口唇に沈線が巡っている。頸部に縦の条線が密に施されている。胎土には粗い砂粒が多く混入している。中期の加曾利 E I と思われる。3 は両端にキザミを伴わないため土器片円盤と考えられる。土器底部に近い部分の破片の縁辺を丁寧に整形している。胎土には大きな砂粒が目立つ。無文のため時期は不明だが、中期の土器片を加工したもので



第6図 出土遺物実測図



あろう。

古墳時代及び平安時代の土師器・須恵器が420点余り出土しているが、いずれも小破片で、器種及び時期を特定できる個体は微量である。古墳時代の土師器には、壺・高壺・甕などがあり、古墳時代後期のものと考えられる。平安時代の土師器は壺・高台付壺などがある。須恵器はいずれも小破片で、タタキ痕を伴う甕・高台付壺・蓋などがある。

8は土師器の甕の底部である。底面に木葉痕が認められる。古墳時代後期であろう。9は土師器の甕の底部で、底径が小さく若干立ち上がっている。胴部は球形と思われる。古墳時代後期であろう。10は須恵器の甕の胴部破片である。外面タタキ、内面はナデによる調整である。11は土師器の高台付壺で、内面が黒色処理されている。9世紀後葉から10世紀前葉であろう。12は土師器の壺である。器厚が厚く緩い立ち上がりである。13は土師器の壺で底面はハラケヅリである。14も土師器の高台付壺である。内面が黒色処理されている。15は土師器の高台付壺と思われる。内面が黒色処理されている。16は須恵器の蓋のツマミである。焼成は酸化炎によるものである。17は土師器の高壺である。壺部は浅い。摩滅が顕著である。

石器類

出土した石器は、縄文時代の石鎌、打製石斧、調整剥片、黒曜石の剥片などのほか古墳時代以降とみられる砥石が出土している。

4は黒曜石製の石鎌である。鎌先及び基部が欠損している。部厚な作りであり、形状は二等辺三角形の凹基鎌と考えられる。現存の長さ2.15cm、幅1.58cm、厚み0.61cm、重量217gを測る。5は黒曜石製の調整剥片である。横長剥片を素材とし、背面には素材剥片周辺からの調整痕がみられる。4の石鎌同様、半透明の黒曜石を使用しており、時期的にも近いものと考えられる。長さ3.81cm、幅1.93cm、最大厚1.33cm、重量7.49gを測る。6・7は変成岩製の打製石斧である。両者とも片面は鏽面で占められている。6は基部及び刃部が欠損しているが撥形を呈する形状と考えられ、現存の長さ8.86cm、幅5.75cm、厚み1.80cm、重量107.75gを測る。7は小型の分銅形に近い形状と考えられ、長さ4.23cm、幅3.81cm、厚み1.09cm、重量22.35gを測る。18は砂岩製の砥石である。形状は不明であるが、一面のみ鏽面を保持しており、他の面は摩耗が著しい。



第3章 総 括

今回の調査対象となった古茂口城跡は、福生寺とその周囲を巡る丘陵が城跡ではないかとされている。調査範囲は丘陵南西山麓の県道端部分であり、そこでは城館に関する遺構・遺物共に検出できなかった。城館に関わる遺構として周辺をみると、調査区の北側の谷奥に所在する福生寺の部分の地形は方形で、開口する南側全縁にあたる部分は直線の土壙状の高まりによって水田と区分され、東・北・西側は後背丘陵によって区画され防御的役割を果たしている。また、後背の尾根上も段階的に広がりを持ち建築物等を構築するだけの広がりが認められる。これは谷戸内を館とし、周囲の尾根を要害とする谷戸式館の一類型かと思われる。福生寺の前身は一溪寺といい、旧地は島山城¹⁾の側にあったという²⁾。その寺名は共に里見義豊室の法名（福生寺殿一溪妙周大師）に由来する。没年は所伝では天文3（1534）年となるが、いずれにせよそれは中興開基であり、境内墓地には古相を示す当地砂岩製五輪塔も存在する³⁾。

古茂口城は、1 kmほど西に所在する瘦せ尾根上に位置する島山城（別名南條城）の支城として捉える考えもあるが、島山城が明らかに戰国期の遺構（16世紀前半）を残している⁴⁾のに対し、古茂口城は明晰な城郭遺構が見られず⁵⁾、築城年代や性格が異なっていたと思われる。今回城郭ないし中世の遺構が検出されなかったのも、館跡門前から離れた西側が調査範囲に相当した結果かと思われる。今後より北東側の開発に際しては注意を要するであろう。

城郭以前の遺構として、9世紀後半から10世紀前半にかけての溝と水田関連遺構が検出された。畦畔を持つ排水溝と水田水際部分と判断される。南を流れる笠沼川までは距離100 mに対し、標高差が6 mほどと比較的傾斜があり、平坦な水田を構築することは不可能である。近年になってやっと耕地整理事業が行われ從来よりは広範な水田に圃場整備されてきたが、それまでは水田としては比較的急傾斜な中に、丘陵端部からの湧水を水源とし、傾斜に応じて小規模な棚田が段々に連続して築かれた景観を呈していたものとみられる。

- 注) 1. 島山城は島山城の誤記かとされるが（大野太平 1933「房総里見氏の研究」）、ここでは従来用いられてきた島山城とした。
2. 斎藤夏之助 1908「島山城址」「安房志」
3. この五輪塔については、早川正司氏の観察所見がある。（早川 2008「中世石造文化財」「館山市権村城跡調査報告書」）
4. 例えば遠山成一氏の指摘などがある。（遠山 2010「南條城跡」「館山市権村城跡調査報告書II」）
5. その構造の概要については、余瀬浩一氏の観察結果がある。（余瀬くんのホームページ「千葉県の城址－古茂口城、古茂口城之内城－」）



写 真 図 版





古茂門城跡

建物周辺空中写真 (S=約 1/2000)

図版 2



西地区丘陵（奥から）



西地区丘陵（西から）



西地区トレーナー場前状況



西地区遺構検出状況



SD-001（西から）



SD-001（南西から）



SD-001・SX-001（奥から）



SX-001遺物出土状況



出土遺物



報告書抄録





千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第5集

館山市古茂口城跡

—一般県道館山大貫千倉線道路改良事業埋蔵文化財調査報告書—

平成27年3月6日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印 刷

株式会社 正文社

千葉市中央区都町1-10-6



